

原著 (Article)

学生への質問紙調査を用いた幼稚園実習の 事前・事後指導の検討

Examination of advance and after guidance of kindergarten
practice using questionnaire survey to students

清 葉子*
KIYOSHI, Yoko*

要 旨

保育所実習を終えた学生に対し、実習内容や実習前に身に付けたい知識・技能に関する質問紙調査を行い、その結果を用いて、幼稚園実習の事前・事後指導で扱うべき内容について検討を行った。質問紙への回答を解析したところ、保育所実習が初めての実習となる大学2年生と既に3回の実習を経た大学3年生では明確な違いが見られた。学生は、経験の差によって、事前指導に求める内容と質が変化していた。先行研究と同様に、実習園との合致感、敬意を抱ける保育者との出会いが、学生の保育職への就職意欲を高めることが示唆された。事後指導としては、実習についての相談の場を設け、担当教員が客観的立場から困難への対処方法や心構えを助言することによって、学生が抱く理想と現実の乖離が修正され、取り組むべき課題の可視化につながると考えられた。本研究の結果から、まず学生の実態を把握し、それに対応した事前・事後指導の立案が、学びへの意欲を高めると結論付けた。

キーワード：幼稚園実習，事前・事後指導，ふりかえり，保育者養成課程

Key words : kindergarten practice, advance and after guidance, reflection, nursery teacher education course

はじめに

保育者および教員養成課程のカリキュラムにおいて、保育所・教育実習は、学生の実践力を高める重要な機会となる（田中，2006；高橋ほか，2011；高橋ほか，2012）。実習の学びの場は、主に現場であるが、養成校では、実習が充実したものになることを目指し、事前・事後指導を行う。事前指導では、心構え、実習前に身に付けるべき知識・技能の確認、実習記録・指導計画等書類の書き方について学び、事後指導では、実習から得た学びを振り返り、今後の課題を見出す支援を行う。

保育所および幼稚園実習は、子どもの発達支援に関する理論と実践の融合の場であり、学生は、この体験を通じて保育者になる意欲を高めていくことが期待される。三

木・桜井（1998）は、「子どもの学習に望ましい変化を与えることができるという信念」を表す「教師効力感」という考え方をうい、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」を表す「保育者効力感」を提案し、保育所・幼稚園実習が短期大学生の保育者効力感に及ぼす影響を調べている。その結果、実習後に保育者効力感が高まることが示されている。その一方で、子どもたち、現場の指導者、保護者との人間関係のつまり、実習園との保育観の相違から自信を失う学生の存在も指摘されている（谷川，2010）。

筆者は、保育所・教育実習が、三木・桜井（1998）の言う保育者効力感を高めるには、実習の事前・事後指導の内容の精査、そして質的な向上が重要であると考えている。事前・事後指導の改善に関する実践的研究は数多く存在するが（例えば、上村，2010；中山・上田，2013；市東，2015；島崎，2015；中山，2016），いずれも対象となった養成校に限った断片的な内容であり、更に事例の蓄積が必要であろうと判断した。そこで本研究では、筆者の所属する養成校に役立つ改善を行うために、まず質問紙調査によって、保育所実習が学生に及ぼす影響の実態を調べた。そして、それらの結果を用いて、保育実習後に設定されている幼稚園実習の事前・事後指導の内容と在り方を検討した。

方 法

調査対象

本研究は、平成27年9月に椙山女学園大学教育学部（愛知県名古屋市）で行った。調査対象は、保育・初等教育専修の2年生81名と3年生82名の合計163名である。保育・初等教育専修に所属する学生は、保育士資格及び幼稚園教諭1種免許状の取得が義務づけられている。これらに加えて小学校教諭1種免許状を取得することができる。本学の実習は、次のように設定されている。1年次2月に2日間の附属幼稚園・保育園での「プレ実習」、2年次9月に2週間の保育所実習「保育実習ⅠA」、12月～1月に施設実習「保育実習ⅠB」、3年次5月に2週間の幼稚園実習「教育実習（初等）A（幼稚園）」、9月に2週間の保育所実習「保育実習Ⅱ」（一部の学生は、保育所実習「保育実習Ⅱ」を施設実習「保育実習Ⅲ」で行う）、4年次5月に2週間の幼稚園実習「教育実習（初等）B（幼稚園）」という流れで実習を行っている。筆者は、「プレ実習」、幼稚園実習の「事前及び事後指導（初等）（幼稚園）」を担当している。

質問紙調査

質問紙調査は、保育実習Ⅰ（2年生）・Ⅱ（3年生）後に行った。質問項目は、①実習の自己評価と楽しさ ②実習内容 ③実習にむけて必要な準備 ④実習指導で学びたい内容 ⑤目指したいと思う保育者との出会い ⑥将来の進路選択の6点である。項目①の自己評価については、A（良い）～D（悪い）の四択から、楽しさは二択から選

択させた。項目②～④および⑥は自由記述、⑤は二択からの選択とした。

結果と考察

(1) 実習の自己評価と楽しさ

表1は、学生による実習の自己評価を、実習が楽しかったと回答した集団、楽しくなかったと回答した集団でまとめ学年ごとに集計した結果である。2・3年生ともに約85%の学生が楽しかったと回答した。学生の自由記述から、子どもおよび実習担当者との良好な関係が、実習を楽しくし、その一方で、実習記録の作成や体調不良、自分の力量への自己嫌悪が実習を苦痛にしていることが示唆された。

表1. 学生による実習の自己評価。数値は人数を示している。実習を楽しく感じた集団と苦痛に感じた集団に分けて集計し、学年ごとに示した。

2年	A よい	B	C	D 悪い
楽しかった	0 (0%)	53 (65.4%)	18 (22.2%)	1 (1.2%)
楽しくなかった	1 (1.2%)	3 (3.7%)	4 (4.9%)	1 (1.2%)

3年	A よい	B	C	D 悪い
楽しかった	8 (9.8%)	56 (69.1%)	5 (6.1%)	0 (0%)
楽しくなかった	1 (1.2%)	5 (6.1%)	4 (4.9%)	1 (1.2%)

自己評価は、2年生より3年生でやや高まる傾向を示した。自由記述から、高い自己評価は、自分なりに積極的に子どもと関わり、実習に取り組めたこと、次につながる課題を見出せたことがその理由として考えられた。逆に低い自己評価は、実習記録の記述の不備や部分実習の準備不足であったと思われる。学生にとって、実習記録の作成や指導計画の立案が大きな課題であり、これらの取り組みへの成否が、実習の楽しさと自己評価の両方に大きな影響を及ぼすことがわかった。

(2) 実習内容

学生が実習で主に担当したクラスは、2年乳児34%、幼児64%、異年齢2%、3年乳児45%、幼児55%であった。学生の実習内容を主に、①集団遊び ②製作活動 ③絵本・シアター ④手遊び ⑤その他の5つの区分に分類し、経験回数とその割合を学年別に示した(表2)。

表2. 学生が実習で取り組んだ内容(複数回答)

	集団遊び	製作	絵本・シアター	手遊び	その他
2年	29 (35.8%)	28 (34.6%)	82 (100%)	67 (82.7%)	16 (19.8%)
3年	45 (54.9%)	49 (59.8%)	82 (100%)	69 (84.1%)	15 (18.3%)

2・3年生ともに、ほとんどの学生が絵本や手遊びなどを経験しており、3年生では集団遊びや製作など実践的な内容を経験する機会が増えている。また、3年生になる

と部分実習・半日実習・一日実習と段階をふんで複数回経験する学生もあり、より実践的な実習内容となっていた。

(3) 実習にむけて必要な準備と今後学びたいこと

学生が実習に向けて最も必要だと感じる準備を主に、①書類の書き方 ②保育技術 ③子どもの発達と姿 ④異年齢保育 ⑤その他の5つの区分に分け分類した(表3)。

表3. 学生が実習に向けて最も必要だと感じる準備

	書類の書き方	保育技術	発達の姿	異年齢保育	その他
2年	38 (46.9%)	22 (27.2%)	17 (21.0%)	2 (2.5%)	2 (2.5%)
3年	8 (9.8%)	43 (52.4%)	27 (32.9%)	2 (2.4%)	2 (2.4%)

2年生では47%の学生が記録・指導計画等書類の書き方、27%が手遊び等の保育技術をあげているが、3年生になると52%が書類の書き方よりも、手遊びも含め実際の子どもの姿に応じた保育の展開が必要になり、様々な場面で対応できる保育技術に向けての準備が必要と考えている。3年生になり、実習段階が進むことで部分実習や責任実習を行う機会も増え、より実践的な力が必要と感じているようであった。

実習指導で学びたい内容は、2年生は書類の書き方や子どもとの関わり方といった実習のための基礎知識や技術を挙げているが、3年生は子どもの発達に応じた指導計画の立案の仕方や保育技術の向上を求めている。事前指導での指導内容も学年に応じた指導を検討する必要があることがわかった。

表2, 3に示した内容については、実習担当者だけではなく、保育関連科目にかかわる教員全体の共通認識とすることが大切である。例えば、保育内容指導法の担当教員は、領域の側面から年齢別の子どもの発達の姿について学生に指導していくことで、学生が実習との関連を意識しながら理解を深めることができ、保育関連科目とリンクさせて、系統的な指導を行っていくことも可能であり、保育関連科目での学びが実習に生かされる授業が展開できるのではないだろうか。

(4) 目指したいと思う保育者との出会いと将来の進路選択

本論文の冒頭に記述した通り、先行研究では、実習での様々な体験と進路との関連性が数多く報告されている。その中でも、本研究では、学生の進路希望と目指したいと思う保育者との出会いとの関係について検討した。学生の88%は、実習中に目指したいと思う保育者との出会いがあり、出会いがあった学生は保育職への思いが強くなる傾向が見られた(表4)。

表4. 目指したい保育者との出会いと進路選択

	強くなった	進路に迷った	他職希望
出会いがあった	101 (71.1%)	27 (19.0%)	14 (9.9%)
出会いがなかった	9 (45.0%)	4 (20.0%)	7 (35.0%)

学生の自由記述から、目指したい保育者とは、子どもを理解する姿勢、子どもへの

支援と指導の在り方、他者と協同する姿勢が挙げられた。2年生で初めての実習が楽しかったと感じた学生は、保育者を目指したいという志向が強くなっていた。楽しさの理由としてあげられた自由記述には、実習での実践的な体験を通して、大変さの中にも子どもとかわることへの楽しさや、保育者の具体的な指導から学ぶことが多かったとの記述がみられた。実習園の雰囲気の良さや実習担当者から丁寧な指導を受けることができたという記述もあり、これらについては、玉瀬（2013）が、「保育職への意欲には実習内容の成果だけではなく、対人関係にかかわる要因が影響を及ぼしている」と指摘している内容と同じであった。

多くの学生が、本学に入学する以前から保育者になりたいと思っていたが、実習で実際に保育に携わる中で、実際に保育現場や保育者から受ける影響力は大きく、学生の気持ちが揺れ動きその後の進路に影響を与える。実習を通して現実に向き合い、自分が保育者に向いているのか、務まるのかを悩む学生もいる。学生にとって、自分の目標としたい保育者に会えることは、進路選択に重要な意味を持つことが確認された。

(5) 事前事後指導の改善

以上の(1)～(4)の結果を基に、保育実習を受けて、3、4年生で行う幼稚園教育実習の事前事後指導の授業改善を行った。教科書は、愛知県私立幼稚園連盟・愛知県保育実習連絡協議会の「幼稚園教育実習実施要項」を踏まえて本学で作成した実習資料・実習ノートを使用した。事前指導の内容は、幼稚園実習に向けて、実習記録の書き方・指導計画の立案・事前の準備・留意事項等を確認しながら、実習中に必要な心構えや基本的なマナーを身に付けられるように配慮した。また、実習後は事後指導として体験を整理し、地区別の実習報告会を行うとともに、学生の実習中の課題や疑問等に対して必要な助言や指導を行い、必要に応じて個別相談・指導の機会を作っている。これらを通して学生一人一人が幼稚園実習を総括・評価することを通して、今後の課題を明確にしていけるように計画した。授業は、内容に応じて学年別または3、4年生合同で行い、アクティブラーニングを用いて、グループで話し合ったり（写真1）、発表したりする機会も取り入れた（写真2）。



写真1. 実習報告会



写真2. 実技交流会

今後の展開

実習を通して様々な困難、いわゆるリアリティショックを感じ、保育職を目指すことを挫折してしまう学生は少なくない。リアリティショックとは、既に就職している者が、「就職前に想像していた職務内容などに対する理想と、就職後に直面した現実とのギャップ」に対処できず、精神的なショックを受ける状態を指す（林・新井、2013）が、実習段階においても同様である（谷川、2010）。このような状況を回避するためにも、実習を通してのリアリティショックへの対処として事後指導は大切な機会である。同時に、学生が実習のふりかえりを通し、今後の課題を明確にする役割も担っている。例えば、実習後の報告会等での学生同士の学びの共有化は、様々な保育観や保育現場の実際にふれる機会として有効的である。また、実習報告会や個別相談・指導を通して学生が経験した実習でのネガティブな経験に対して教員が客観的立場から困難への対処方法や心構えをアドバイスする等、学生が抱くギャップの修正や課題を可視化する取り組みも必要である。

平成28年度全国保育士養成協議会中部ブロック第21回セミナーにおいて、平成27年度専門委員課題研究の専門員から、事後指導の大切さについて報告され、実習を通しての学生の学びや成長を捉える「実習チャート」の活用が提案された。今後は、学生がふりかえりを通して自らの成長感を実感できるワークシートの内容も検討していきたい。

謝 辞

本研究は、日本保育学会第69回大会においてポスター発表した「保育実践力の育成・向上に関する研究(9)―保育職を目指す意欲を高める指導―」に加筆・修正したものである。研究をまとめるにあたり、保育実践研究会のメンバーの皆様、本学教育学部准教授野崎健太郎先生にご指導をいただきました。ここに感謝申し上げます。また、アンケートにご協力いただきました学生の皆様にもお礼を申し上げます。

■引用文献

- 市東賢二（2015）保育実習における体験的学びの記述としての実習記録への一考察：保育実習Ⅰ（施設）・保育実習Ⅲ事前指導への「実習記録練習シート」の導入と運用について、上田女子短期大学幼児教育学科保育者養成年報，9：8-15。
- 上村晶（2010）実習事前指導における模擬保育ビデオを活用したカンファレンスの実際と効果，高田短期大学紀要，28：89-100。
- 島崎あかね（2015）保育実習Ⅰ（保育所）事前指導における実習記録の指導内容：視覚教材の活用について，上田女子短期大学幼児教育学科保育者養成年報，9：5-7。
- 高橋裕子・大瀧ミドリ・今村聡美（2011）幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と事後の自己評価について―「教材研究」「子どもの気持ちの読み取り」「満足度」の観点から―，東京家政大学研究紀要，51(1)：7-13。

- 高橋裕子・大瀧ミドリ・吉澤千夏・今村聡美（2012）幼稚園教育実習前後における保育技術の習熟度と学び—テキストマイニングによる分析を通して—, 東京家政大学研究紀要, **52**(1) : 1-8.
- 玉瀬友美（2013）保育実習経験が保育職への意欲に関連するか, 日本教育心理学会第55回総会要旨集, p. 226.
- 田中幸代（2006）同学年モデルの観察および観察されるモデルとなることが大学生の保育実技の「準備」・「自己効力」に及ぼす効果, 教育心理学研究, **54** : 408-419.
- 谷川夏美（2010）幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容, 保育学研究, **48**(2) : 96-106.
- 中山美佐（2016）幼稚園教育実習の意義と目的についての考察：実習生の保育者観と不安の変化についての調査から, 樟蔭教職研究, **1** : 55-62.
- 中山忠政・上田慎二（2013）効果的な「保育実習指導」に関する研究：事前指導における部分保育案作成の試み, プール学院大学研究紀要, **54** : 275-284.
- 林牧子・新井美保子（2013）学生から保育者への移行期支援—若年保育者の不本意な離職・休職を防ぐために—, 愛知教育大学幼児教育研究, **17** : 11-19.
- 三木知子・桜井茂男（1998）保育専攻短大生の保育効力感に及ぼす教育実習の影響, 教育心理学研究, **46** : 203-211.